

东方语言 文化论丛

DONGFANG YUYAN
WENHUA LUNCONG

魏育邻

主 编

第三辑

香港教育出版社

东方语言文化论丛

第三辑

主编 魏育邻

编委 顾也力 韦立新 林秀梅
蔡金城 黄以亭

香港教育出版社

书 名：《东方语言文化论丛》第三辑

出 版 社：香港教育出版社

社 长：古广祥

主 编：魏育邻

责任编辑：洋 清

封面设计：乔 声

社 址：香港元朗青山道 99-109 号元朗贸易中心 24 楼全层

电 话：00852-24750383 传真：00852-24751168

电子信箱：lxp@hktmc.com

国际书号：ISBN962-8753-29-2

规 格：大 32 开

字 数：220 千

版 次：2004 年 2 月第一版第一次印刷

印 数：1—1000

印 刷：广东省精装印务有限公司

定 价：港币 20 元

本书已向香港政府注册 版权所有 翻印必究

序 言

在广东外语外贸大学东方语言文化学院广大教师的共同努力下，《东方语言文化论丛》（第三辑）与大家见面了。

在教学工作之余进行学术研究，这本是作为一名大学教师的份内之事。然而这几年随着我国高等教育规模的不断扩大，在校学生人数迅速增加，师资力量不足的矛盾日益突出，老师们承担的教学工作量越来越重。在每天疲于应付繁重的教学任务的情况下，再要求老师们必须完成规定的科研工作量，这近乎是对大学老师们的一种苛求了。但是尽管如此，东语学院的老师们仍然孜孜以求，丝毫不放松对业务的钻研，撰写出了一篇篇有独立见解的论文，汇集成这一本论文集。这是一种非常令人敬佩的精神。

广东外语外贸大学的日语、泰语、越南语、印尼语等专业都已有较长的历史，也都有过辉煌过去。但是由于历史原因和客观条件所限，各专业在较长一段时间内跟英语专业等相比，各方面都有较大的差距。近年来随着一批学有所成的博士、硕士从国内外各地来到东语学院，大大充实了师资队伍，提高了科研水平，其中年轻教师尤其表现出了强劲的科研热情。这一辑收入的论文虽然不能说都是上乘佳作，但是它们代表了一个整体意识，代表了一个强烈的信号。这是一件非常令人高兴的事情。

近年来，东语学院积极开展对外交流，多次邀请国外著名学者来我校讲学。这次收入的日本著名学者小森阳一教授的主旨发言稿，为本论文集增添了不少光彩。此外，东语学院的日语研究生人数也在逐年增加，这次特别收入了几位硕士生、博士生的文章，为这些未来的学者们开辟了一块发挥才能的园地。希望他们能够在这块园地中茁壮成长，早日成为学科领域的栋梁之材！

广东外语外贸大学教授 博士生导师

陈 访 泽

2003 年 12 月于白云山麓

目 录

现代文学理论与历史认识	小森阳一 (1)
现代语言学理论与文学研究	魏育邻 (21)
《浮云》与《金色夜叉》比较	张秀强 (32)
隐喻思维与大江健三郎的文学创作	兰立亮 (38)
《一个女人》中的性差化叙述者	彭 英 (53)
论日语的主题句	陈访泽 (61)
用言连用形与连用修饰	张慧明 (74)
论日语的间接言语行为	刘小珊 罗诞诚 (87)
论在日语教学中导入文化因素	刘 丽 李 莹 (101)
试论日语中的人称限制	潘洁敏 (113)
中日敬语对比研究	庞 焱 (119)
论会话中谓语省略的认知过程	李惠清 (132)
日语隐喻属性的认知阐释	
——与隐喻的传统修辞学阐释相比较	刘小珊 (145)
口语体印尼语的特点	杨安华 (162)
从正音正字法看泰语外来语的发音规范问题	吴圣杨 (177)
越语副名词在汉越翻译中的运用	苏彩琼 (182)
成熟的理论, 新颖的框架	
——介绍陈访泽教授新著《日语句法研究》	张文恒 (189)

理论重构与教材重写

——漫谈翻译教学 丁国旗 (197)

谈谈越南语视听课教学中的听写环节及其他 黄以亭 (204)

日语会话课所见问题点、原因分析及对策 刘先飞 (212)

培养学生的语言交际能力

——浅谈泰语基础阶段教学 罗奕原 (219)

对我校韩国语专业办学特色的几点思考 魏丽娇 (228)

浅谈在中国研究二宫尊德思想的意义 张宪生 (234)

二宫尊德与安藤昌益 姚奇志 (242)

试述军人政权对泰国民主政治的影响 罗奕原 (250)

现代文学理论与历史认识

——小森阳一教授在“现代文学理论与日本近代文学研究”
国际学术研讨会上的主旨演讲

小森阳一

小森陽一教授の基調講演「現代文学理論と歴史認識」

2002年11月9日広東外国語外貿大学の主催による

「現代文学理論と日本近代文学研究国際シンポジウム」にて

魏育邻 车洁 彭英 吴小梅 洪曼根据录音记录整理

岛村辉 魏育邻校正全文

今日私のお話しするのは、「現代文学理論と歴史認識」というテーマです。それは20世紀に確立された現代の文学理論そのものが、20世紀から21世紀を生きる私たちの歴史認識にどのようにかかわっているのか、ということを改めて2002年の11月という現在においてふりかえてみたいということでもあります。

現在、私たちが「現代文学理論」というふうに呼んでいる理論体系が現れはじめたのは、1960年代の後半でした。それはとりわけ、フランスの文化人類学のなかで、20世紀初頭に現れたソシュールの構造主義的な言語学、乃至記号論的な言語学が改めて読み直されたというところから始まっております。それはかつての植民地宗主国であったフランスの文化人類学者が、旧植民地の未開の地域をフィールドとしながら、そこにお

ける人々の生活を徹底して研究するというのが文化人類学であります。当初はそこで使われている言語は一切分かりません。けれども、そのフィールドのなかにおけるさまざまな宗教的な儀式や、あるいは生活慣習、生活の中で発話される一つ一つの声というものを記述しながら、その部族なら部族における、たとえば、宗教的聖なる空間と俗なる空間、あるいは倫理的な善と悪、そうした二項対立的な枠組みの中にそれぞれの発話された声を分配していくと、やがて、その、今まではまったく理解することのできなかつた言語をもつ部族の言語を基本的に理解することができるようになる。こういう方法論が レヴィ＝ストロースをはじめとする文化人類学者によって確立されたわけです。まさに未開の言語をそのように記述することによって、実は自分たちの属している文明としてのフランス語の言語システムが一体どのようなになっているのか、ということが逆照射されていくという形で、二項対立的な価値の枠組みをベースとした構造主義的な言語学の基本的な理論体系が確立されるわけです。つまり、言語は確かにこの世界に現実存在する事物を指したり、名指したりしてはいるわけですがけれども、言語それ自体のシステムとして価値の体系やそれに基く宗教的な体系或いは政治、社会、文化全体に通じる一つのシステムを持っている。で、そのことが現実の世界とは独立した形で、記号のシステムが一つの独自の論理体系によって成り立っている、というソシュールの構造主義的な言語学が現実世界の認識に適応されていくという形になったわけです。このような二項対立主義の発見ということがもちろん記号が物理的にこの現実世界に現れる、物理的な側面と、直ちにその物理的な側面を受け止めた瞬間にそこに発生する記号の内容、その二つが記号表現と記号内容、シニフィアンとシニフィエがメダルの裏表のようになって成立しているのが言語記号である。これはまさにソシュールの構造主義

的な言語学における、構造とは一体何なのか、ということを実現しているわけです。一言で言えば、それまで一つのものとして考えられていた言語記号というものを、二つの側面として捉え直すということにほかなりません。

従って、構造主義的な言語学がそれまで一つの領域として考えられていた、あらゆる人間的記号的実践を、改めて二項対立的なシステムの中に分割して考えて行くという方法を打ち出したわけです。で、実はこのような二項対立主義の発見は、結果としてそれまで信じられていた近代主義、モダニズムを批判せざるを得ない論理的な枠組みになってしまったわけです。確かにすでにある言語システムを二項対立的な世界として分析して行くだけの作業は、現在あるその地域やその歴史的な段階における社会の価値の体系や宗教的な考え方や政治的な制度や権力関係を結局は肯定し、容認し、追認し、その時の権力の正当性を証明することにしかありません。このような構造主義的な言語学や構造主義的な記号学を編み出した人たち自身によって、このようなスタティックな、静的な、つまりダイナミズムのない構造主義的な分析が直ちに批判されるようになるわけです。その批判される時期が世界的発生した、エマニュエル・ウォラーステインの定義によれば、1968年革命と呼ばれている、第二次世界大戦後の世界全体を揺さぶる革命的な状況と、この構造主義的な言語学に対する、二項対立主義の批判が現れた時期がほぼ同じであったということも、ここで思い出しておく必要があるだろうと思います。

それは取りも直さず1960年代という時期が、世界的にどのような時期であったのか、もはや多くの人が忘れ去っているかもしれませんが、当時もっとも強く主張されたのは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、三つの「A」の連帯ということでありました。それは第二次世界大戦まで、19世紀から20世

紀の産業資本主義の時代に、欧米列強を中心とする資本主義国がいわば世界を植民化地し、分割していたという第一次世界大戦までの時期に、植民地化されたかつての植民地が大きく独立性へ向けての運動を開始し、そして大量の血を流しながらではありましたが、独立を達成していたというのが1960年代だったわけです。現在の文学理論の基礎が確立されたフランスにおいては、まさに第二次世界大戦に勝利した、英雄としてのドゴールがアルジェリアの植民地支配を継続することによって、繰り返し繰り返し行われるそのテロ攻撃と全面戦争が、アルジェリアではフランスによって、第二次世界大戦の戦勝国によって展開されていたわけです。

つまり、ここに一つの理論が生まれてくる歴史的な前提というものを、私たちは見ることができます。つまり、1960年代の反植民主義闘争、或いは旧植民地諸国が宗主国から独立していく、そのような独立戦争のプロセスの中で、それまでの植民主義的な言語のシステム全体が批判されていくことになったわけです。それは世界を文明と野蛮、或いは植民者と被植民者、征服者と原住民、主人と奴隷、先進と後進、進歩と停滞、中心と周縁、本物と偽者というふうに二分割し、そうした一連の二項対立主義的な概念を直ちに、例えば文明が真であり、野蛮は偽りなのだと、或いは文明が善であり、野蛮は悪なのだった、客観的な根拠によっては実は決定することのできるはずのない、超越的な二項対立を頂点とする大きな世界的なヒエラルヒーの中に封印してきた、そのような言語システム全体を批判する動きが1960年代に始まっていたわけです。それは当然のことながら、そのような言葉のシステムの中で構成されるものこそがサブジェクト、主体なのだ。しかしそのような、あらかじめ二項対立主義的な、野蛮と文明という差別と排除のシステムを持っている言葉の体系の中で構成された主体は、果たし

てこの世界を変えうる主体になりうるのかどうかという主体をめぐっての根本的な問いかけもこのような中でなされていたわけです。

そのように考えてみますと、野蛮と文明、進歩と停滞、先進と後進という、まさに19世紀から20世紀の、いち早く産業資本主義を確立した国々が、それは日本も含めた帝国主義国家が文明と進歩と先進を占有し、そのかつての宗主国が支配していた植民地に、野蛮と停滞と後進が一方的に押し付けられ、そしてその収奪と搾取の構造が変わらない、このような世界的な状態に対して、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの独立運動は決定的な世界を転換する政治運動でもあると同時に、社会変革の運動であり、同時にそれは文化的考え方そのものを転換する運動だったわけです。

私は、そのような時点で中国の指導者であった周恩来が、第二次世界大戦後のソ連とアメリカの二大国を中心とした、西と東に世界が二つに分けられた、そのような冷戦構造の中において、その西と東の大国が成立しているのは、徹底して貧しく、野蛮と停滞と後進にさらされていた第三世界の犠牲の上に成り立っているのだと、そして、第三世界との連帯ということを、中国の指導者がこの時期に提起したことを、改めて私はふりかえておきたいと思います。

その意味で、この構造主義的な言語学の限界を指摘した、自ら構造主義的な論理を打ち立てながら、同時に直ちにそれを60年代の後半に批判していた、例えば、ミシェル・フーコーやジル・ドローズやフェリクス・ガタリ、或いはジュリア・クリステバ、更に、ロラン・バルトやジャック・デリダも含めて、多くの人たちが「テルケル」というフランスの雑誌に集まった知識人だったということもここでは思い起こしておきたいと思います。一言で言えば、「テルケル」という雑誌はフランスのマ

オイストの人たちの集まりであった、つまり、現代の文学理論の一番基底の所に、一言で言えば、マオイズムということなのですが、それは厳密に中国における毛沢東主義とは異なるとは思いますが、東と西という二項対立に対して、その二項対立的な世界構造が隠蔽し、忘却している第三項としての第三世界。その存在を表に出したということの意味は極めて大きかっただろうと思います。それまさに、構造主義的な言語学、記号学が持っている最終的には二項対立主義に還元されてしまうような分析の方法の中において、隠され、抑圧され、隠蔽されている第三項を表に出し、そこから自明なことと思われた二項対立を改めて批判していく、そのような批判の理論が実は周恩来が提起した第三世界論であり、それは今なお有効であるということを改めて確認しておきたいというふうに思うわけです。

このような二項対立主義に陥った構造主義的なその発想方法に対する批判の理論として、後に、ポスト構造主義、或いはポストモダニズム、乃至そこから生まれたポストコロニアルという一連の「ポスト」という接頭辞がつく様々な議論が現われてくるわけです。まず、第一に考えておかなければならない問題は、例えば、ポストモダンという考え方が、1970年代後半から80年代にかけて、英語圏において一斉に強力な流行をしたですね。では、そのポストモダンは一体どのような基本的な考え方に基づいていったのか、そして、それは何故生まれてきたのかということを改めて取りあげ直して見る必要があるだろうと思います。ポストモダンという考え方が主要には英語圏において、とりわけ、イギリスや、アメリカの学者たちがフランスの思想家であるジャック・デリダのディコンストラクションという概念を英語圏に翻訳する中で生まれてきた潮流であったという歴史的な限定性をここで繰り返す必要があると思います。それは明らかに1970年代後半には、それまでの第二次世界

大戦後の世界構造が1968年の革命と同じような形で、しかし、その内実は多くの場合、世界的なメディアの中では語られなかった形で大きく転換したということを思い思い起こしておく必要があると思います。

この会場にいらっしゃる方は1979年を同時代的に生きていらした方とまだ生まれていなかったという方もいらっしゃるかもしれません。1979年という年は、私個人小森陽一にとって極めて大きな意味を持っているのは、この年の十月に、私は初めて日本近代文学界の学会で研究発表をしました（大学院生として）。そして、その時に今日いらっしゃる高橋修さんとも始めて出会い、言葉を交わしたわけです。つまり、小森陽一が日本近代文学研究者になる、日本近代文学会という制度的な社会にデビューした年であった。そして、その学会は日本の古い都市である金沢という町にある金沢大学で行いました。私が発表を終えて、夜の懇親会に金沢の町に出て行く時に、その日、号外が配られていました。その号外は韓国のパクチョンヒが暗殺されたという号外でした。その時の記憶は私は今でも大きくその世界が転換していく一つの予兆として受け止めていましたが、しかし、まだその時の私の頭の中では、1979年の初頭から起こっていた一連の事態というものは一つの繋がりの中に置かれていませんでした。今改めてその問題をふりかえて言いますと、例えば、2001年の9月11日に起こったあの事件の全ての前提が、1979年に発生していたということに改めて驚かされるものかもしれません。1979年の2月、イランでイスラム革命が起こり、亡命していたホメイニが帰国いたしました。で、このイランにおけるイスラム革命はそれまで私が知っていた様々な革命、フランスにおける市民革命、アメリカの独立を象徴されるような市民革命、更には、1917年のソビエト連邦が生まれた時の社会主義革命、そして、もちろん、

中華人民共和国が成立する時の社会主義革命といった東西の冷戦構造を支えていた、つまり、西側は市民革命以降の自由と平等の国民国家を作ってやっていく。それに対して、東側は1917年のソ連の革命以降の、階級をなくしたそのような社会主義経済を行いながら、緩やかに共産主義に向かっていくという東西の冷戦構造の対立を作り出したその出発点にあったのも、実は、革命という概念であり考え方だったんですが、その私の知っている二つの革命とはまったく異質な革命が1979年にイランで発生いたしました。その前のイランの政治状況とはどのような状況であったのかと言えば、それはアメリカの石油多国籍石油企業、メジャーがですね、イランの埋蔵されている石油を自由にアメリカの資本主義のために使う、そのような戦略の中で、パーレビ王朝というアメリカが作り出した親米、アメリカに親しい、独裁開発型の政権が成立していたわけです。つまり、アメリカが石油エネルギーを独占し、その力によって世界を支配していくという構造に対して、石油資源を持っている国家が自らの国家の資源の（言わば）保有権を主張した、そのことが政治も、宗教も、社会的な規範も、そして、経済活動まで全て「コーラン」という一つのテキストによって行っていくという、それまで世界に類例を見なかった新しい国家がイラン革命によって登場したわけです。イランの石油をアメリカのメジャーを自由にすることができなくなったアメリカは直ちにイランを敵視し、その隣での国であったイラクに徹底した軍事援助をしていくことになるわけです。現在アメリカが秒読み段階に入っている悪の枢軸の一つの国としてのイラクのフセイン体制というのは、1979年以降の状況の中でアメリカとその諜報機関であるCIAが作り出したい軍事暴力国家なわけです。つまり、自らの育て上げた鬼子をアメリカが攻撃しなければならない。その無限の連鎖が始まっていくのが1979年であった

わけです。

もう一つ、これは中国の皆さんとともに思い起こすことは様々な政治的問題を喚起してしまうことではあるわけですが、アジアにおいては、東西冷戦構造の基本的な形がこの年に崩れてしまいました。それは、例えば、フランスのマオイストたちがある時期強く支持していたインドシナにおける旧フランスの植民地からの独立闘争を展開し、そこに、アメリカが介入したことによって、アメリカとの全面的な戦争になった、あのインドシナ戦争、そして、それは世界的にはベトナム戦争と呼ばれたんですけれども、そのベトナム戦争が1976年に終わった後ですね。カンボジアにおいて、言わば、自国民を徹底して虐殺していたテロ国家とも言うべきカンボジアのポルポト政権がこの1979年に崩壊しています。そして、ベトナムがカンボジアに進攻し、そして、中国がベトナムと戦争を始める。つまり、アジアにおける社会主義国同士がそれぞれの様々な事情があったにしろ、ナショナリズムを前提とした戦争体制に突入したというのが、1979年でありました。その意味で、安定した、アジアにおける東側の構図が崩れていくと。同時に、それはソ連周辺でもこの同じ年に発生します。1979年の暮れには、親ソ、ソ連に親しい国家であったアフガニスタンにおいてクーデターが発生し、暴動政権が崩壊し、ソ連がアフガンに進攻する。やはり、社会主義同士の戦争が行われています。勿論、その後、全てが明らかになったように、アフガニスタン問題というのは世界の石油の状況で言えば、カスピ海で産出される石油を如何にして大洋側にもっとも安く運ぶのか、そのパイプラインをめぐる権力闘争が続いているわけです。実は、アフガンにソ連軍が進攻して以降、やはり、アメリカがそのソ連軍に抵抗する勢力をバキスタンと協力して作り出していくことになるわけです。アメリカが9・11の主謀者として名指ししたビン・

ラディン、そして、アル・カイダという組織は1979年からアメリカがこの地域で育て上げた組織であります。アメリカが石油の利権のために育てた軍事暴力組織を、アメリカが再び鬼子として攻撃しなければならないという事態の種が蒔かれているのも、この1979年でありました。

では、1979年にこうした所謂東西の冷戦構造の基本的な構図が崩れてしまったのは、一体どこに理由があったのでしょうか。その典型的事例は1979年から81年にかけてのイギリスとアメリカ、19世紀に世界を支配していた、大英帝国の末裔としてのイギリスと、第二次世界大戦の世界を、言わば領導してきたアメリカの二つの国によって、大きな危機が発生していたわけです。それは一言で言えば、ニューディール型の国家が崩壊したということでもあります。ニューディール政策というのは1930年代世界が大恐慌に襲われた以後、アメリカでとられた基本的な政策でありました。そして、この政策に基づく国家のあり方が、例えば、ライシャワーが日本で展開した近代論、モダンの自由主義的な資本主義国家の一つのモデルでもあったわけです。ニューディール型の国家と言うのは、どのような国家なのかと言え、それは一国の中の製造業ですね、勿論、産業革命を経た機械工業によつての製造業によつて生産される新しい技術革新に基づいた商品を、対外的な貿易で売り、その商品の優秀さによつて海外から貿易黒字を獲得し、その国家全体として獲得した黒字を、医療や教育や、あるいは福祉と言う形でその国の低所得者層に返していくと、この低所得者層に経済的なその恩恵を返すことによつて、国内市場の消費力、需要力を上げることによつて、国内商品の経済を豊かにして、こういうシステムですね。ですから、ニューディール、新しい分配のシステムであったわけです。それで、実は、このシステムはすでに大英帝国、イギリスでは徹底した植民地からの榨取と抑